

9. 笹川の地神信仰のあり方と役割

東福寺 薫

はじめに

朝日町の笹川を歩くと、道路の脇や畑の隅に石で造られた塔や祠のようなものが見られる。それは「地神^{ちじん}¹³」と呼ばれる神様だった。昨今信仰心が薄れてきている中で、いまだいたるところに地神のような神様が残っていることに驚き興味を持ち、元より信仰にも関心があったため、私は地神を調査対象にすることを決めた。

本章では最初に、一般的・全国的な地神信仰について述べたのち、笹川の地神のあり方、特徴について、(1)地神に参る時期、(2)参る人の範囲、(3)お供えするもの (4)日常生活における地神信仰の位置づけ、主にこれら4点に着目して、笹川にある各一族の地神がどのような役割を果たしているのか、笹川の人々が地神に対してどのような意識を持っているのかを私なりに考察していきたいと思う。

1. 調査地の概要

調査地域である笹川は、JR 北陸本線泊駅から南東へ直線距離で3 kmほど入ったところにある山間^{やまあい}の村である。村の中央には、標高1042.4mの黒菱山^{くろびしやま}を源流とする笹川が流れている。山々に囲まれた非常に自然豊かな村である。村には、1182年(寿永元年)に信州の諏訪大社の分祀社として建立されたといわれる笹川諏訪神社や真宗大谷派の寺院である正覚寺がある。

人口は平成24年6月時点で323名、うち男性164名、女性159名、世帯数は128戸である。笹川は、主に7つの苗字のいずれかを持つ村民から構成されている。7つの苗字を持つ村民については、信仰を記述する際に詳しく述べることにする。村内では今も屋号が使われており、下の名前では通じなくても、屋号を使えば通じることの方が多い。笹川は上流から下流に向かって、表向き^{おもてむ}(神向き)、中向き^{かみむ}、裏向き^{なかむ}と大別されるが、その表向きには折谷氏^{おりたに}と小林氏一族、中向きには長井氏と勝田氏一族、裏向きには竹内氏と堀内氏、深松氏一族が中心となって住んでいる(図1)。

¹³地神の表記および読み方について、どの文献でも「地神」という表記は一律であるが、その読み方は、「ヂシン」であったり「ヂヂン」であったり、さまざまである。ここでは「地神」の表記を、主に現地の人々の間で使われている「ヂジン」という読み方に則ろうと思う。

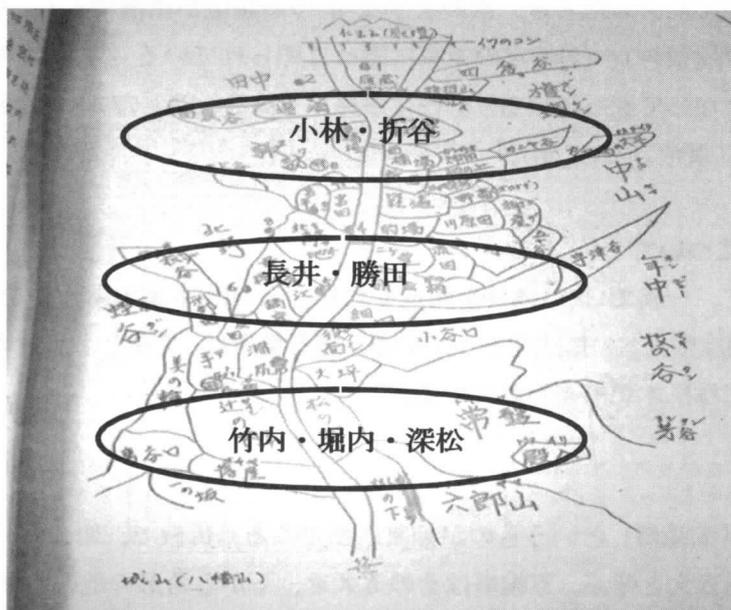


図 1. 各氏族の主な居住地

2. 地神信仰の概要

ここでは、地神とはいったいどのようなものなのか、以下で概要を説明したいと思う。

2-1. 全国に伝わる地神信仰について

地神というのはそれぞれの土地での呼称であり、学術的な名称は屋敷神である。一般的に屋敷神の定義は「個人の宅地の一隅、あるいはこれに接続した小区画、もしくはやや離れた持ち山の山林など屋敷の付属地に祀られている神社であり、家族が祭祀する私祭の神社」とされる(直江廣治、1987年)。

屋敷神の呼称は実に多岐にわたり、(1)ウチガミ・ウヂガミ(東北地方一帯から北関東)、(2)チヂン・ヂノカミ・ヂヌシ(中部日本から関東地方・九州を除く東日本)、(3)コウジン(岡山県・島根県)、(4)イワイジン・イワイガミ(祝神)・イワイデン(祝殿)(信州を中心に甲州および兵庫県)、(5)マツリガミ(愛媛県の南・北宇和郡から高知県)、(6)チンジュ(鎮守)(全国的に点々と)、(7)ダイジヨゴ・ダイジゴ(福井県の三方郡から敦賀郡)、(8)小一郎ガミ(大分県の国東半島を中心に宇佐・大分の両郡・熊本県の肥後地方)、(9)祭神名によって呼ぶもの(稻荷・神明・祇園・熊野・天王・白山・愛宕・秋葉・八幡・天白・若宮・不動・山ノ神など)というものがある。つまり、屋敷神信仰は全国的に存在する。

屋敷神の神格について、一般神・自然神¹⁴を祀るとする土地も多いが、祖先神を祀るとする土地もある。また、家代々の死者が屋敷神になる、としている土地があったりと、その神の性格や祀

¹⁴ 自然現象や事物を特別な力を備えた存在として崇拝し神格化したもの。例えば風神や雷神。

り方はまちまちである。

祭祀者の範囲について注目したとき、次のような 3 つの類型が指摘できる。(1)部落内の各戸に祀られている「各戸屋敷神」、(2)特定の旧家に限って祀られている「本家屋敷神」、(3)本家の屋敷神を同族が一体となって祀っている「一門屋敷神」である。以上の 3 つの類型は全国的な規模で分布している(直江廣治、1987 年)。

2-2. 笹川の地神信仰について

笹川の地神について、一族で 1 つ地神を祀っており、上の(3)本家の屋敷神を同族が一体となって祀っている「一門屋敷神」の形式をとっている。祀る場所は、7 家とも屋敷の隅か、背戸¹⁵山際にあつて、その傍には巨木が植えられている。

2-3. 五輪塔とは

一族の地神の中に「五輪塔」というものが頻繁に出てくる。仏教で、地・水・火・風・空を五大主要元素、すなわち五大と呼ぶ。五輪塔はその五大を、下から角形の地輪、球形の水輪、笠形の火輪、花形の風輪、宝珠形の空輪を積み重ねて仏としたものである。時代が下ると、五輪塔は浮彫りの板石五輪や、本尊の梵字(大日如来)だけを刻む板碑となった(岩波仏教辞典、1989 年)。

3. 各一族の地神

ここでは、各一族の持つ地神について詳しく見ていこうと思う。

3-1. 笹川の開拓者 7 人の同苗について

笹川を開拓したと伝えられる 7 家を「7 人の同苗」という。初めに土地に入って居住したのが「亮」と「佐衛門」の二人である。二人は土地の領有を定めた境界を仕切が谷と名付け、これをのちにシギヤラ谷と呼んだ。亮は仕切が谷の北に住み、佐衛門は南に住んだ。佐衛門は佐渡から来たため自分の住む地を佐渡谷と名付けた。続いて 3 番目に「三郎佐衛門」、4 番目に「與兵衛」、「五郎右衛門」、6 番目に「六郎右衛門」、7 番目に「七郎佐衛門」が村に来た。これら 7 人が入村した時期は正確には不明であるが、亮と佐衛門の居住後、保元(1156 年~1158 年)・平治(1159 年)の頃にのちの 5 人が村に入ったのではないかと推測されている(笹川村学友会、1941)。亮は竹内氏の祖先、佐衛門は長井氏の祖先、三郎佐衛門は小林氏の祖先、與兵衛は堀内氏の祖先、五郎右衛門は深松氏の祖先、六郎右衛門は折谷氏の祖先、七郎佐衛門は宇津氏の祖先とされる。現在宇津氏は笹川には住んでいないが、系図を見ると宇津氏から勝田氏が出ている。現在中向きに住んでいる勝田氏が宇津氏から出たという説は有力だと思われる。

ちなみに、入村した順番によって各一族の権威が違うということはない。

¹⁵ 家の裏口、または裏手。

3-2. 折谷家の地神

現在折谷家には明確に「地神」と言われているものはないようである。以前は表向きに位置する「雁蔵」^{がんぞう}地区にあったと言われる。「前、上の方(雁蔵)に地神があるっていうから調べたことはありましたけどねえ。半日かけて大変な思いをして探したけれど見つからなかったねえ。折谷家は2つの系統に分かれていて、うちともう1つなだけけれど、そのもう1つの家は絶えてしまっていてね。その家があったところを見ても、(地神は)見当たりませんよ」とのことだ。

地神を持っていた家が絶えてしまうと、地神に参る人もいなくなり、行方も分からなくなってしまうということだろう。「地神と言うのは、(笹川の)開祖の墓かもしれないし、その開祖が石の仏様みたいなものを自分達の守り神として祀ったかもしれないし、(地神に対して)いろんな説があって、地神というものがいったいなんなのか、よく分からないのですよ。ただ、私は五輪塔を地神ではないと思っています。五輪塔は鎌倉時代のもので、地神はそれよりもっと前のもの」と語る。男性は、自宅の庭にある五輪塔と石の仏様を見せ、「これは五輪塔(写真1)。こっちは顔みたいに見えるでしょう(写真2)。昔の人はこんなような仏様みたいな石を神として祀っていたんじゃないかと思っています(以上全て70代男性)」と語った。



写真1. 庭先の五輪塔



写真2. 人のように見える石

3-3. 小林家の地神

小林家の地神は、表向きの「田中」地区に存在する。舗装されていない細い道を上った小高い丘の上にあるため、参るのが少々大変である。地神は五輪塔3基(写真3)で、周りには大きな杉の木が植えられている。地神が建ったのは、鎌倉～室町時代にかけてだと言われているが、定かではない。

小林氏の地神を管理している人に話を聞いた。まず参る時期や参る人々の範囲について、「参る時期は主にお盆で、普段参ることはあまりない。富山市に住んでいる息子や孫は、笹川に来たときだけ参るよ。昔から自分たち以外の一族の人が参っているというのも聞かないなあ」との語りを得た。お供えするものについて、「お花、お線香、ろうそくかな。場所が場所だけに、猿に

荒らされてしまうので食べ物はお供えしていないよ。お供えするものとか、とくに誰かに教わったとかではなくて、見よう見まね。小学生時代に親に連れられて何をお供えしていたか見ていたから」と語った。

周囲の人々の意識や、地神についてどのような意識をもっているのか、また今後についてなど心配なことはあるのかを尋ねたところ、「息子(50代)は地神についてあまり重要だとは思っていないみたいだ。粗末にすると罰が当たるとは言っているけれども。地神の周りの杉の木も大きくなった。私が中学生のときはまだ背丈も低かったけれど、今ではこれでもかというほどの大きさ。地神を参るにもちょっとした山道を通らなければならなくて大変だけれど、土地神だし安易に動かさない。それともしこの土地が他の人に渡ってしまったら、地神はどうなるのか？(以上全て70代後半男性)」と心配している。



写真3. 小林家の地神

3-4. 勝田家の地神

勝田家の地神は、中向きの「北角地」^{きたかどち}地区、管理している人の住居から少し上がって、道路に面したところに存在する。道路になる以前は、雑木林であつたらしく、楓、紅葉などが地神の周囲に植えてあつた。地神は五輪塔2基と石の祠(写真4、5)である。五輪塔が建つたのは室町時代とされている。うち1つは古くなって新しく作り直したもので、大きい五輪塔がその作り直したものの、小さい五輪塔が古いものだという説もある。作り直したのがいつ頃の出来事なのかは不明である。石の祠が作られたのは「おじいちゃんの曾祖母の代にできた」と聞かされている(富山市在住40代男性)とのことから、150~200年ほど前のことと思われる。また、その石の祠の中には梅の木で作られた天神様(菅原道真)が祀られている(写真6)。この天神様は地神信仰とは関係のないものだが、「一緒に祀って少しでも権威が高まればいいと思って(70代男性)」ということで、石の祠の中に祀っているそうである。またある方は、「勝田家の地神の石の祠の中に新鎌の地神が入っているのを見たことがあるような気がするな。地藏様みたいな石でできたのが(70代男性)」

と語った。この新鎌の地神というのは、後に記すが、竹内家の地神のことである。五輪塔と石の祠は、そのままと風化してボロボロになってしまうということで、現在管理している家の者がゴム素材のものでコーティングし、壊れないように保護されている(写真7)。

参る時期や参る人々の範囲について、勝田家の方に尋ねたところ、「お参りをするのは、大体お正月とお盆。お供えするものは、御神酒とか自分の家で作ったお餅とか^{さかき}榊の葉っぱ。お花はあんまりあげないねえ。あと、何か作ったら御仏壇にお供えしたりするでしょ？ あんな感じに何か料理を作ったら地神にお供えしたりするよ。笹川には他の土地から嫁いできて、地神があるってこともそこで初めて知ったんだけど、嫁いでくる前から御仏壇にお供えしたりする習慣はあったし、地神にお供えをすることも当然やるものだと思っていた。特別に教えられなくても見ていればできたから、地神のことで苦労したことはないよ(70代女性)」という語りを得た。

地神のおかげで助かったとか、何か良いことがあったというようなエピソードはあるかと尋ねると、「20年くらい前、免許を取って車に乗り出して間もないころ。地神が建っているところに少し崖になっているところがあるでしょ。あの辺で車をバグさせようとしたらハンドル切り損ねて崖の下の畑の方に車ごと落ちこちそうになったんだけど、思わず『地神様、助けてー！』って言ったたら、地神のところちょうど引っかかってコトンって止まったの。崖の下に落ちずに済んだ。見に来た保険会社か何かの人も『うまい具合にはまりましたね~』って感心していた。私は『地神様が助けてくれたんだ』と思っている。それから車で出かけるときは地神に手を合わせてから行くんだよ(前出70代女性)」と語った。また、「地神の話はおじいちゃんからよく聞いていた。『地神の場所を動かしてはいけないよ』とは言われていたなあ。小学校低学年くらいのときは、地神のことを(私たちが普段参るような)お墓だと思っていたなあ。私が地神のおかげで助かったとかいうようなエピソードはとくに思いつかないけれど、おじいちゃんは『戦争でシベリアに行っていた自分が無事に帰ってこられたのは、地神のおかげだと思っている』と語っていたよ(前出40代男性)」という語りも得た。

地神について何か心配なことなどはあるかと聞くと、「これから(世の中の動きや自分たちの家が)どうなっていくかは分からないけれど、やっぱり地神をお参りする習慣は途絶えてほしくない。車のことで助けてもらったこともあるし、思い入れがあるから.....(前出70代女性)」と語った。



写真 4.5. 勝田家の地神(全体図)

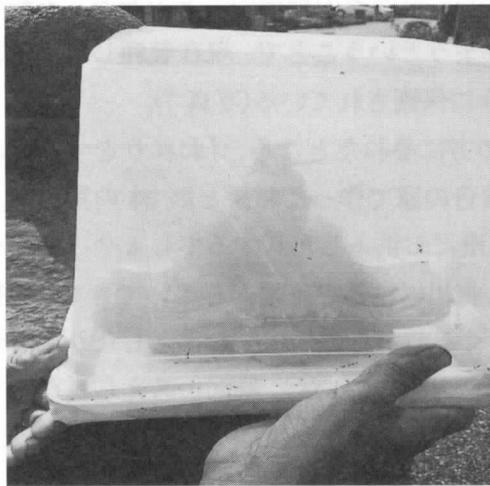


写真 6. 石の祠の中にある天神様



写真 7. コーティングされた五輪塔

3-5. 長井家の地神

長井家の地神は、中向きの「宮平」^{みやだいら}地区、地神を管理している人の畑のすぐそばにある。住居ともさほど離れていない。現在は地神の周囲に木や切株は見当たらないが、60年ほど前は杉の木が株があった。地神は五輪塔1基と、右手に蔵の鍵、左手におにぎりを持って両手をあげた百姓の姿の石像1基からなる(写真8、9、10)。これは長井家の方(80代女性)の話で、他の人は「いや、あれは蔵の鍵じゃなくて、草刈りの鎌だ」と言っていたり、「右手に草刈り鎌を左手に玉をもって……(宮崎村誌編纂委員会、1954)」のような記述もあつたりするため、どれが真実なのか定かではない。地神が百姓の姿であることから、米俵を入れておく蔵の鍵とその米を使ったおにぎりを持っていると考えれば、しっくりくる気もするが、写真を見ると草刈りの鎌と玉の方が、形は近いように思う。

地神が建ったのは、南北朝から室町時代だと言われている。写真のとおり、石の扉は新しく作ったもので、以前は木製の格子戸の向こうに地神が隠れていた。普段は、格子戸の替わりにつけられた石の扉の向こうに地神は隠れている(写真8)。

地神に参る時期および参る人々の範囲について尋ねると「お盆と春祭り¹⁶と秋祭り¹⁷と山祭り¹⁸かな。基本的に地神に参るのは、(地神を)祀っている長井の本家と分家の人ということだけど、昔は分家のお年寄りも参ってお賽銭をあげていたりしたけれど、今はあんまり(長井家の分家の人間は参らず、本家の人間くらいしか参らない)ね(前出 80代女性)」との語りを得た。またある人は、「本家と分家の付き合いもあんまりないし、分家になればなるほど(地神に対する)意識はあんまりないねえ(70代後半男性)」と語った。そして、地神にお供えするものを尋ねると「御神酒、御鏡、たまにお花かな。そういうのをお供えするのは、だいたい私(前出 80代女性)」と答えた。

¹⁶ 以前は、3月12日におこなわれていたが、現在は4月第3土曜日におこなわれている。

¹⁷ 以前は、8月27日におこなわれていたが、現在は8月第3土曜日におこなわれている。

¹⁸ 2月9日におこなわれている。



写真 8. 長井家の地神(普段の姿)



写真 9. 扉を開けた様子



写真 10. 百姓姿の石像

地神のおかげで助かったとか、何か良いことがあったというようなエピソードはあるかと尋ねると、「長井家にとって地神は心の拠り所みたいなもん。私はバイクで家を出るとき、必ず地神にお参りする。信仰が1番あついのは息子(東京在住 60代男性)。じいちゃんの影響じゃないかなあと思っているけれど、『笹川史稿』もよく読んでいたし。研究に行き詰ったり、(息子さんの)奥さんが体調を崩したりして、地神にお参りすると良い方向に道が開けるって言っていて、そんな風に思っているとは思わなくてびっくりした(前出 80代女性)」と語った。

地神様について今後気がかりなことはあるかを尋ねたところ、「(地神は)石(の祠)に入っているし、息子も地神に興味があるみたいだし、少なくとも息子の代までは続いて、途絶えることはな

いんじゃないかと思っている。じいちゃんに大事にしろって仕込まれているから。たとえ途絶えたとして、他の身内(長井の分家)に地神を託すっていうことはあんまり考えたことはないかな。地神を守っていかなければならないっていう責任があつてちょっと重くも感じるけれどね(前出80代女性)」と、少し笑って語った。地神を少し重く感じているということは、それだけ地神が長井家を守る神として、大きな存在であるということだろう。

3-6. 竹内家の地神

竹内家の地神は、裏向きの「尻江」^{しりえ}地区、県道102号線に面したところにある。そのため、他の地神のなかで最も分かりやすい場所に地神が建っていると言える。

ただ、これまで竹内家の「地神」と述べてきたが、結論からいうと、これは「地神」ではない、という(ただし便宜上、地神と呼ぶことにする)。五輪塔等の集合体と、五輪塔が並んでいるが(写真11)、実はもう1つ隣に現代風の墓が並んでいる。道路ができる以前(45, 6年前)は、五輪塔3つの墓だった。道路を作るにあたり、墓を現在の位置にずらしたり、最近になって新しく墓を作りなおしたのである。現在地神とされている1番左側のもの(写真12)は、村の人が様々な場所から拾ってきて自然と集まったものである。五輪塔以外の自然の石なども、家に置いておいたら不幸なことばかり起こるので、ここに集めたい。どうやらあまり関係のないものようだ。そして、そこには笹川村と地神に関する説明が記された看板が建っている(写真13)。

では、本物の地神はどうなったのか。民話をまじえて、説明したい。その民話とは「やんちゃもん^{へいべえ}平兵衛」というもので、内容は以下のとおりである。

「昔、笹川に平兵衛というやんちゃもんがおったそうである。『太陽が東から出る』といえば『西から出る』と押し通すほどだったから、村のおやっさま²⁰たちにたてついたり、村の風習などにはことごと反対した。力は強く暴力もふるうので、村では寄りつく者もない鼻つまみ者だったそうである。—中略—さしものやんちゃもん平兵衛にも、とうとう寿命がきて、八月のある日息をひきとった。村の火葬場でもやされたが、よく朝、家のもんが骨を拾いにいくと、骨のかけらも灰もなくなっていたそうである。地獄から来て、骨をみんな持っていったちゅうことである。それからは、平兵衛のことを『平兵衛新釜(地獄の新しい釜)』というようになったということである(笹川の民話 原文ママ)。」

これが、「やんちゃもん平兵衛」のおおまかな内容である。この平兵衛というのは、およそ300年前、泊から竹内家に婿養子にきた人である。民話のとおり、平兵衛はそうとうな乱暴者であつたらしく、桑の木に座って鎌を持っては、薪を海の方で魚と交換してきた人々から盗っていたという話もある。民話の中では「新釜」となっているが、「新鎌」ではないかとも考えられる。『新しい鎌ほど良く切れる』から『平兵衛新鎌』(よそから新しく村へやってきた平兵衛が頭のよくきれる者であつた)っていうんだ(70代男性)」という話もあるため、以降「アラガマ」の表記を「新鎌」とすることにす。また、平兵衛は竹内家にまつわる大切な文書を燃やしてしまい、現在竹内家の本家がどこなのか分からない。これは平兵衛が村の貧富の差をなくそうとしたため

19 やんちゃもんとは、①横暴者②粗暴者のことである。

20 村の顔役のことをさす。

ある。竹内^{またえもん}弥十郎、又^{しんざえもん}右衛門、新左衛門のどこかが竹内家の総本家であると言われていて、今、弥十郎が本家であるとされているが、文書が消えてしまったため、実際は定かではない。「本物の地神は平兵衛新鎌が持っていたんだけど、もう家が絶えてしまったから、(本物の地神が)どうなってしまったのかわからない。昔は(今の地神がある場所より)もっと上の方(表向き)にあったんじゃないかなあ。今地神だって言われているのは普通のお墓。地神を持っている他の家は、地神の他にご先祖様のお墓を持っているけれど、うちはこれだけ。今のお墓(地神)がいつできたのかもわからないねえ。私が聞いているのは、今お墓がある場所は死んだ新鎌の骨があったところだっていうこと。地神は戦で手柄をたてた家がもらえたっていうことも聞いたことがある(70代女性)」「勝田家の地神の石の祠の中に新鎌の地神が入っているのを見たことがあるような気がするな。地蔵様みたいな石でできたのが(前出 70代男性)」と竹内家の地神の持ち主は語った。墓として参っているということで、「参るのはお彼岸とかお盆。お供えするものはお線香、ろうそく、お花。(地神の周りの)草を刈ったり、花あげたりするのも私(前出 70代女性)」と語った。つまり、元々は平兵衛が地神を持っていたが、家が絶えてしまって、その地神の行方ははっきりとは分からないということだ。現在竹内家の地神とされているものは本物の地神ではないのである。



写真 11. 竹内家の地神とされているもの



写真 12. 五輪塔、板石五輪などの集合体



写真 13. 看板

地神と五輪塔

深い山に囲まれ、激しい戦の絶えなかつた城山のふもと、笹川は祈りの村であった。

鎌倉時代から、特定の家（長井、竹内、折谷、小林、宇津、堀内、勝田の七氏）には、守護神として屋敷のすみやこれに続く山すそや河岸で祖先を祭る地神を持つようになった。

地神には、仏教でいう五大をあらわす五輪塔が建てられ、神の依代よりしろとし、叢林そうりんが育て守られて、一家の神聖な祭場となっていた。

五輪塔は下から角形の地輪、球形の水輪、笠形の火輪、花形の風輪、宝珠形の空輪を積み重ねて仏とした。時代が流れると、五輪塔は浮彫りの板石五輪や、本尊のぼん字（大日如来）だけを刻む板碑となった。

この地神は竹内氏のもので、笹川の古い地神信仰遺跡の一つである。

看板の文

3-7. 深松家の地神

深松家の地神は、裏向きの「北野」地区にあり、電気柵を1つ越え、またもう1つ越えるとようやく到達できる。現在、深松家の地神はないのではないかという話も耳にしていたのだが、柵を外して見せていただけることになった。かなりわかりにくい場所にあり、電気柵もあるため、自力で探すのは難しい。地神は、四角い土台に自然の石と五輪塔の1番上だと思われるものできている。いつ頃建ったものかは不明である。

地神を参る時期や参る人々の範囲について、「お盆だけお参りしている。普段は(地神を意識することは)あんまりないね。参るのも私ぐらい(70代男性)」という語りや、「昔は母に連れられて参っていたけれど、今はもうしていない。誰も参らずに草だらけになっているんじゃないかな。(地神がある)場所は知っているけれどね(深松姓が身内にいた80代男性)」という語りを得た。やはり、どこの一族とも同様、地神の持ち主の家から遠くなってしまうと、お参りする機会もない

ようだ。地神にお供えするものは、ろうそく、線香、お花である。

地神が建っている場所に関して、次のような語りを得た。「今、地神として祀っているものは、地神でもあったし一族の墓でもあった。昭和 17、8 年頃のことかな。山崩れが起き、地神が崩れてしまった。墓でもあったわけだから、骨がいっぱい出てきたよ。山崩れがあつてから、正覚寺の裏に移したんだけど、20 年くらい前に、山崩れがあつた場所がコンクリートで固められて安全になったからまた地神を元あつた場所に戻したというわけ。この際だから、地神は地神、墓は墓で別々にしようと思って、先祖の墓を新しく作って、それは今正覚寺の裏にある(前出 70 代男性)」

地神様について今後気がかりなことはあるかを尋ねたところ、「深松家の守り神として、大事にしなくちゃいけないという気持ちはある。自分の子どもは、地神がある場所を知ってはいるけれど、自分がいなくなったら、お参りすることもなくなるんじゃないかと思っている(前出 70 代男性)」と心配していた。

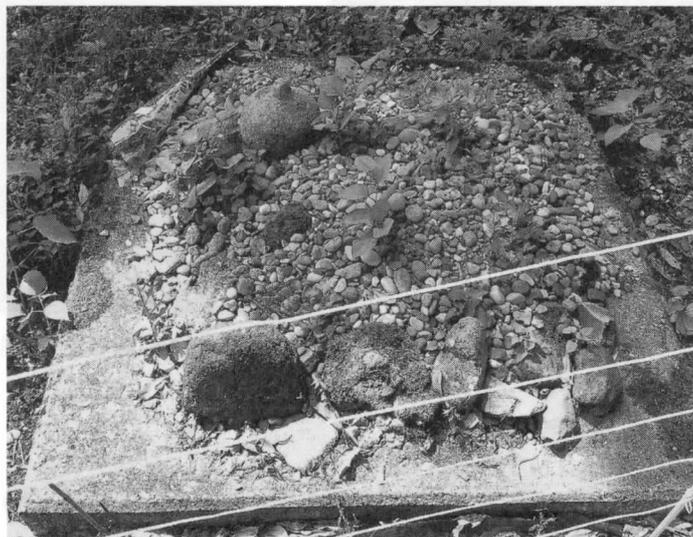


写真 14. 深松家の地神

3-8. 堀内氏の地神

堀内家の地神は、裏向きの「北野」地区にあったと言われている。堀内家の方に地神について尋ねてみたが、「今は本家が絶えて笹川から出て行ってしまったし、詳しいことは分からないなあ。家が絶えて地神もなくなったんじゃないかな(70代女性)」とのことである。堀内家の本家である堀内九郎兵衛氏くろべえの家だった場所の裏に、地神があったのではないかと思われる箇所があった。地神のある場所は、たいてい屋敷の隅か背戸の山際だということで、この辺りにあったのではないかということだが、はっきりしたことは分からなかった。



写真 15. 堀内九郎兵衛氏くろべえの家の裏



写真 16. 地神があったと推測される場所

3-9. 宇津家の地神

現在、笹川に宇津姓の方は住んでおらず、詳細は不明である。宇津姓が勝田姓になったというが、宇津家の地神が勝田氏のものになったという話も聞かない。以前は裏向きの「宮田」にあったらしい。現在は竹藪となっていて、跡地のみである。正覚寺の裏にある墓地に移して、石碑だけが建っているとも言われているが、それらしきものは発見できなかった。

4. まとめと考察

以上のことをまとめて、地神への人々の意識について考察したいと思う。以下にそれぞれの項目について表1にまとめる。

表1. 各氏族の地神

氏族名	折谷氏	小林氏	勝田氏	長井氏
建立時期	不明	鎌倉～室町時代	室町時代(石の祠は江戸時代? 五輪塔の1つは建て直されたか、その時期は不明)	南北朝～室町時代
参る時期	不明	盆	正月、盆、車で外出時	盆、春祭り、秋祭り、山祭り、外出時
参る人の範囲	不明	管理する家	管理する家	管理する家
供えるもの	不明	花、線香、ろうそく	御神酒、餅、榊の葉、料理	御神酒、御鏡、花
氏族名	竹内氏	深松氏	堀内氏	宇津氏
建立時期	不明	不明	不明	不明
参る時期	彼岸、盆(お墓として)	盆	不明	不明
参る人の範囲	管理する家	管理する家	不明	不明
供えるもの	線香、ろうそく、花	線香、ろうそく、花	不明	不明

各一族で、地神の祀り方は様々である。地神の形から始まり、参る時期、供えるものなど、それぞれ似通っているところもあるが、皆思い思いに祀っている。

建立された時期は、室町時代付近というのが1番多い。石でできた地神は大分丸みを帯びている。参る時期については、どの一族も盆に参るといのは共通している。その他、正月であったり、祭りの時であったり、各一族参る時期はさまざまである。ただ、地神のみを祀るための祭りという日は、どこの一族にもない。勝田氏や長井氏のように、地神が比較的住居から近いところに祀られている家は、普段外出時に参ることも多いように感じる。

笹川の地神は一門屋敷神の形式をとるとされているが、地神を参る人々の範囲を見ると、どの一族も、一族で祀っているというよりは、地神を持つ本家でのみ祀っているという印象を受ける。「昔は分家の年寄りも参っていた」という語りもあり、以前は一族で参っていたこともあるようだが、現在では、分家は関わらないようだ。中には、本家が絶えてしまって、それと同時に地神の行方も分からないという一族もあり、本家が絶えて、村からいなくなってしまうと、地神が他の人にわたり受け継がれていくということもなさそうだ。

以上のことから、現在では一門屋敷神というよりも、特定の旧家に限って祀られている、本家屋敷神の形式の方がより近いものなのではないか。

供えるものについても、各一族さまざまだが、小林氏、竹内氏、深松氏は線香、ろうそく、花が共通しており、勝田氏、長井氏は御神酒のような口に入るものであることが共通している。前者3氏は地神が五輪塔の形式をとり、後者2氏は五輪塔に加え、石の祠や石像といった特殊なものが地神であることが何か供えるものに関係しているのかと考えた。

話を聞くうちに地神が何を祀っているものなのかについても、様々な説があるということが分かった。笹川の開祖の墓であるとも、開祖が自分達の守り神として祀ったものだとも、その土地を守るものだとも言われ、地神の定義は非常に曖昧である。個人主義化が進んだ現代では、一族という意識は薄れ、地神を一族のものではなく、本家のものと考えようになったのではないか。「笹川では『一村一家』といって、村を笹川という1つの家族と捉えている考え方があるけれど、どんどん薄れていっている」という話もある。地神を持つ人の中には、「子どもが村には住んでいない」という人も多い。「自分がいなくなったら地神はどうなるのだろう」という声が多く聞かれた。「思い入れもあるし、お参りする習慣はなくなってほしくない」「自分達の守り神だから」という語りもあった。地神を今ある場所から笹川以外の場所へ移す、という可能性は低いと、もし村で受け継ぐものがいなくなってしまうと、地神も絶えてしまうかもしれない。本来は別々のことではあるが、家を継ぐということと、地神信仰の継承は関連してくるのではないか。

謝辞

最後に、今回笹川で調査するにあたり、協力していただいた方々に感謝の言葉を記したい。突然の訪問、幾度にもわたる訪問にもかかわらず、嫌な顔をせず私を温かく歓迎してくださり、話を聞かせてくださった方々、「あの人なら知っているんじゃないか」と教えてくださったり、忙しい中その方のお宅にまでわざわざ連れて行ってくださった方々、貴重な資料を貸してくださった方々、本当にお世話になりました。話を聞かせていただくたびに、「お茶でも飲んでかれ」「このお菓子持ってかれ」と様々なおもてなしをしていただいた方もいらっしゃり、申し訳なさと同時にありがたさもありました。感謝してもしきれない次第です。無事調査を終えることができたのも、皆様の協力あってのことだと改めて感じています。こうして皆様と調査を通して出逢い、交流ができ、皆様の温かさに触れられたことを本当にうれしく思います。笹川の皆様のますますの発展を祈っております。本当にありがとうございました。

参考文献

笹川村学友会、1941年、『笹川史稿』

竹田聴洲、1957年、『祖先崇拜』

宮崎村誌編纂委員会、1954年、『宮崎村の歴史と生活—船と石垣の村—』

直江寛治、1987年、『民間信仰の比較研究』

笹川小学校閉校時記念誌編集委員会、1994年、『さゝ郷の流れとともに』

笹川青年団獅子舞研究委員会、1970年、『溪谷の村 笹川の獅子舞』

朝日町、1984年、『朝日町誌—文化編—』

中村元 福永光司 田村芳朗 今野達 編、1989年、『岩波 仏教辞典』

笹川の民話